

意外にむずかしい大過去

今回のタイトルを見て、芥川賞作家庄司薫の小説『ぼくの大好きな青髭』のもじりだとわかる人はもう少ないだろう。もちろんこれは反語なので、白状すると大過去は長らく私の鬼門だった。フランス語教師としてはあるまじきことである。

フランス語の時制組織のなかでの大過去の機能はどんなものだろうか。この問題を考えるのにおもしろい逸話がある。フランス語の童話や民話などの物語は、原則として単純過去で書いてある。みなさんよくご存じの『赤頭巾』も『シンデレラ』も単純過去で書かれている。昔、ある言語学者が『赤頭巾』を複合過去を使って書き直せるかという実験をしたことがある。結果は見事に惨敗で、最後まで書き直すことができなかった。単純過去には複合過去に置き換えることのできない独自の機能があるのである。この話をあるフランス人にしたところ、ちょっと考えて「書き直すとしたら大過去を使ってですね」と言った。これを聞いた私はたいへんショックを受けた。そんなこと考えてもみたことがなかったからである。この事件以後、大過去は私にとってますます謎の時制になったのである。

文法の教科書には大過去の意味は、「過去のある時点より前に完了している出来事を表わす」などと説明されていて、次のような例が挙げられていることが多い。

(1) Quand je suis arrivé à la gare, le train *était déjà parti*.

「私が駅に到着したとき、列車はもう出てしまっていた」

この例では「私が駅に到着した」が過去の出来事 (E1) で、「列車の出発」(E2) はそれ以前に起きているので大過去になると説明される。このとき、E2はE1のわずか一分前かもしれないし一時間前かもしれないが、それは大過去の意味に関係ない。E1の時点ですでに終わっているということだけが重要なのである。

大過去には視点の移動がある

しかしこの教科書的説明は明らかに不十分である。抜けている重要な点は、大過去には半過去と同じく話し手の「視点の移動」があるということだ。そうでないと次のような大過去の使い方を説明することはできない。

(2) [いらついたあなたなんて想像できないと言った人に向かって]

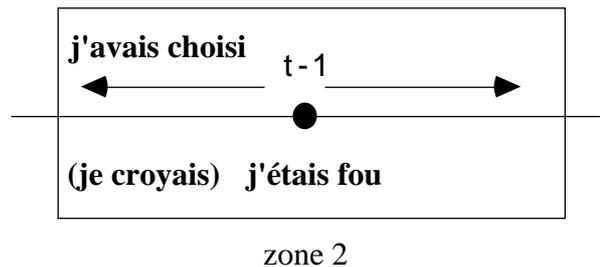
On voit que tu ne m'as pas vu ce matin au supermarché, j'étais fou ! J'avais choisi une caisse que je croyais la plus rapide et en fait, c'était la plus lente !

「今朝のスーパーでの僕を見てないからそんなこと言うんだよ。僕はすっかり頭

に来てたんだから。一番早いと思ったレジに並んだら、それが一番遅いレジだったってわけさ。」

なぜここでは *J'ai choisi une caisse que je croyais la plus rapide.* と複合過去にならないのだろうか。「僕は一番早いと思ったレジを選んだ」という文を仏訳しなさいという練習問題があったとしたら、もちろん複合過去で正解なのである。

例(2)の最初の文 *On voit que ...* は現在形で始まっているので話し手の視点は現在にある。しかし、その文の終わりの *j'étais fou !* あたりで、視点は今朝の失敗という出来事の場面に移動している。失敗の時点 $t-1$ を新たな現在として出来事を語り出すと、その現在とはもうレジに並んでいる場面である。並ぶ前にレジを選んだのだから、選んだのは $t-1$ よりも前のことなので大過去になるのである。いつもの図式で描くと右のように表せる。



ちなみに *que je croyais* の半過去は

j'avais choisi と同じ時点なので、図では左向きの矢印の下に位置し、*j'étais fou* よりも過去になるが、これは半過去が時制の一致を起こさないためこうなるのである。

知らないうちに視点が移動している大過去

さらに謎めいた大過去の用法を見てみよう。BはAとの待ち合わせ場所でAを待っている。そこへAがかなり遅れて到着する。Aは待ち合わせ場所を間違えたのだ。

(3) A : *Ça fait une demi-heure que je te cherche !*

「30分もあなたを探したわよ」

B : *Je t'avais pourtant donné rendez-vous ici !*

「でもここで待ち合わせって言ったじゃないか」

A : *Hein ? Tu m'avais dit : «Au restaurant de la grande place !»*

「なんですって? あなたは『大広場のレストランで』って言ったわよ」

B : *Non, je t'avais dit celui-ci, mais tu n'écoutes pas.*

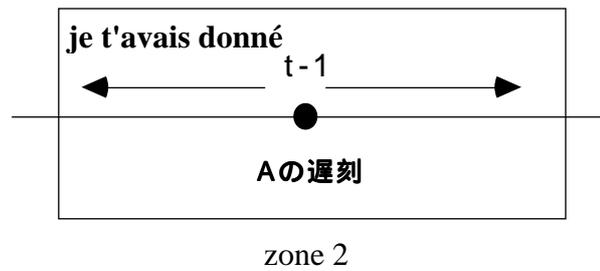
「いや、僕はここでと言ったんだ。君はちゃんと聞いていないんだから」

教科書的説明ではこれをどう説明するのだろうか。大過去は「過去の出来事のそのまた過去」と言われているが、ここには大過去の基準となる過去の出来事がない。

もしBのセリフを複合過去にして *Je t'ai donné rendez-vous ici.* としたらどうなるだろう。Aが遅刻したことを非難するニュアンスは消えてしまう。「ここで待ち合わせをした。だから君はここに来た」とでもいうように、Aが遅刻せずまるで時間通りにやって来たような話になってしまう。ここでは「Aが場所を間違えて遅刻した」という現実の出来事が重要なのである。たった今起きた遅刻という出来事でも、

「もう変更のきかない過去」と見なされると、大過去の基準点となる過去の出来事となりうる。だから図式では右のようになる。

この用法の大過去は日常会話でも意外によく出てくるが、教科書で教えられることは少ない。



(4) a. [花瓶を割ってしまった人に]

Je t'avais bien dit de faire attention !

「注意するように言ったじゃないか！」

b. Ce n'est pas ce que j'avais espéré.

「これは私が望んでいたこととはちがう」

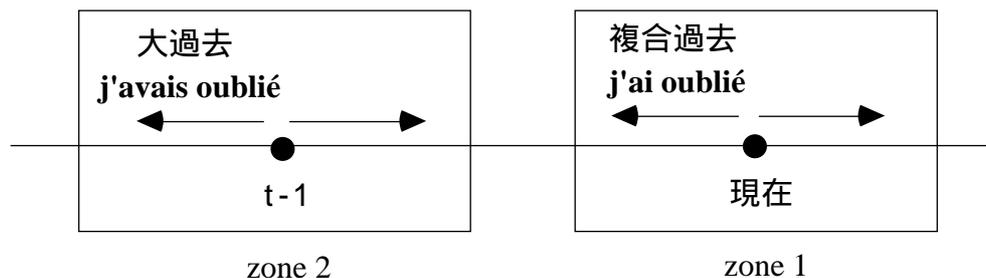
c. [忘れていたことを指摘されて]

Zut ! J'avais complètement oublié !

「しまった。すっかり忘れていたよ」

この例では、a. 花瓶を割ったこと、b. 期待通りに運ばなかったこと、c. 忘れていたことを指摘されたことが、大過去の基準点となる過去の出来事となる。こう言うと不思議に感じる人がいるかもしれない。a.を例に取ると、これはたった今目の前で花瓶を割ってしまった人に言うセリフである。花瓶が割れたのはたった今だから、過去の出来事とは言えないのではないかという疑問である。もっともな疑問だがこの考え方は正しくない。割れた花瓶は元に戻せない。取り返しのつかないことは「過去」と意識されるのである。「過去」とは「確定」ということなのだ。

例(4)c.を *J'ai complètement oublié!* と複合過去にすると意味が変わってしまうことに注意しよう。こちらは忘れてしまって思い出せないときに言うセリフである。(4)c.では誰かに指摘されて思い出している。複合過去だと忘れていて、大過去だと思い出しているというこのちがいはどこから来るのだろうか。もう一度ふたつのゾーンからなる図式を見てみよう。



このタイプの大過去では、zone 1とzone 2の両方が働いている。「忘れていたことを指摘された」という出来事が、基準点となる t-1 を指定する。だから「忘れていた」ということは、t-1 よりも左側で成り立つことになる。だから大過去なのである。一

方、今では誰かに指摘されて思い出しているのだから、現在を中心とする zone 1では「忘れていた」ということは成り立たない。zone 1とzone 2とは断絶していて連続していない。するとおおまかに言って、zone 2は「忘れていた過去」であり、zone 1は「思い出した現在」となり、両者は対立することになる。

もし、複合過去を使ったら関係するのは zone 1のみとなる。zone 1の中で、複合過去と現在は「地続き」なのだから、忘れてしまった結果、今では覚えていないということになってしまう。大過去と複合過去の意味のちがいはこのように説明することができる。

例(4) b. の *Ce n'est pas ce que j'avais espéré.* のタイプの大過去について、「特に大過去にする必然性はない」とか「論理的用法とは言えない」などと書いてある文法書があるが、とんでもない話である。この大過去には十分に必然性があるのだ。同時に冒頭でお話しした童話の書き換えで、「単純過去の代わりにするとしたら大過去になる」というのもこれで理解できる。物語が展開するのはzone 2においてだが、出来事を表わせる完了形としては大過去形しかないからである。

(とうごう・ゆうじ)